二〇一〇年十二月　山陰研究　第三号　抜刷
島根大学法文学部　山陰研究センター

幕末の米子歌人

―新出鹿島本家和歌資料の探究のために―

原　豊二

【論　文】

幕末の米子歌人

―新出鹿島本家和歌資料の探究のために―

原　豊二
（米子工業高等専門学校）

摘　要

近年、鹿島本家（米子市立町）から和歌関連資料がまとまった形で発見された。これらの資料によって幕末から明治初頭にかけての米子地域の歌壇の状況を理解することができる。既存の資料と合わせて、幕末・明治の米子歌壇のあり様を再検討し、近世末期の地方歌壇の実態を具体的に提示する。

キーワード：米子歌壇、鹿島本家、類題和歌集、小谷古蔭、黒沢翁満、長沢伴雄

一、はじめに

本稿は、幕末から明治初頭にかけての城下町米子の和歌事情について考察するものである。この時期の米子の和歌事情については、既に『米子市史（旧版）』[1]、『鳥取県史』[2]におおまかな記述がある。しかし、近年、鹿島本家（米子市立町）から多くの和歌関連資料が出てきたこと、また関連する資料の翻刻・影印刊行・マイクロフィルム化が進んだことにより、米子歌人の新たな姿を見ることが可能になった。よって、ここに幕末の米子歌人のあり様を改めて示し、近世末期の地方歌壇の一考察としたいと思う。【写真1】

二、類題和歌集に見られる米子歌人たち

近世後期に、歌題ごとに詠歌を分類した「類題和歌集」が広く編纂されたことは周知の通りである。その中には、地方に住まう人物の詠歌も多く載せられた。こうした「類題和歌集」群が、地方歌壇の発展の一翼を担ったことは言うまでもないだろう。

その中でも、加納諸平[3]の編『類題鰒玉集』[4]は最もよく知られている歌集である。「類題和歌集」の編纂の多くは、国学者によってなされて

写真１　現在の鹿島本家（米子市立町）

おり、加納諸平もその一人であった。『類題鰒玉集』は、文政十一年（一八二八年）の初編をかわきりに、全七編が刊行されている。そのうち、米子の歌人が登場するのは、二編からとなる。以下、『鰒玉集作者姓名録』（天保十二年（一八四一年）刊）また『鰒玉集五編作者姓名録』（弘化二年（一八四五年）刊）などを参考にして、米子の歌人たちをこの集からまず追ってみたい。

『鰒玉集作者姓名録』の二編の部には、「武彦　伯耆米子医師　中林玄備」と記されている。この中林武彦であるが、続く三編から六編まで立て続けにその詠歌が採録されており、この分野では先駆的かつ中心的な活動をした人物と考えられるのである。『鰒玉集作者姓名録』ならびに『鰒玉集五編作者姓名録』は、編纂方針として前編までの既出者を掲載しないので、中林武彦の場合も後の「作者姓名録」への記載はないが、その詠歌はしばしば見受けられる。なお、『類題鰒玉集』の二編の刊行は天保四年（一八三三年）、また三編は天保七年（一八三六年）の刊行である。

『類題鰒玉集』においては、天保十二年（一八四一年）刊行の四編以降、米子の歌人が急増する。『鰒玉集作者姓名録』の四編の部には、次の通りある。

正年　伯耆米子神主　門脇貢
重正　伯耆米子　鹿島次輔
重矩　伯耆米子神主　門脇愛之助
千占　伯耆米子侍医　西村台重
豊秋　伯耆米子　後藤定三郎
喜宣　伯耆米子勝田神主　佐々木文之進
重尚　伯耆米子　鹿嶋猪三郎
安嗣　同　同　医師　中林作太郎
常之　伯耆米子医師　片尾安長

既に「姓名録」に記載のある中林武彦を加えると、この四編において十人の人物の詠歌が入集したことになる。このうち鹿島重正（一八一六～一八五七）は、『鰒玉集作者姓名録』三編の編者ともなっており、こうした類題和歌集にまつわる活動に深く関わったものと考えられる。この四編の編集が飯田年平であることを考えると、因幡・伯耆のネットワークを介した事業としてこの編集が想定されよう。また、米子の豪商でもあった鹿島重正の資金的援助と、その見返りとしての米子歌人の入集の急増を関連させてもよいだろう。鹿島重正は、「作者姓名録」の編集・刊行を行うことが、自らの住まう米子歌壇の繁栄へと結びつくと考えたのであろう。なお、鹿島重正は鹿島分家三代目で、「翠の屋」

と号し、墓は米子市寺町の心光寺にあるという。[5]

続く『類題鰒玉集』五編は、弘化二年（一八四五年）の刊行である。『鰒玉集五編作者姓名録』には次の通りある。

かめ子　伯耆米子　近藤周助妻
秀興　伯耆米子　三好久五郎
秀顕　伯耆米子　三好吉十郎
載親　伯耆米子　門脇志賀之丞
常蕃　同　米子　近藤宇八郎
秀篤　伯耆米子　三好才五郎
長智　伯耆米子　鹿島次郎右ェ門
喜昌　伯耆米子勝田　佐々木豊後守
隆尚　伯耆米子医師　片尾泰蔵

「姓名録」の既出者である鹿島重正、中林武彦、門脇重矩、鹿島重尚、西村千占に、「姓名録」に遺漏されたと考えられる米子の歌人、佐々木喜蔭[6]を加えると、十五人を数える。うち、鹿島長智は鹿島本家五代目、本居大平門下の人である。[7]

六編は嘉永五年（一八五二年）の刊行であるが、「作者姓名録」が編纂されることはなかった。六編のうち米子の歌人と思われる人物は、門脇重矩、三好秀顕、鹿島重尚、中林武彦、中林古樹、門脇重固、三好秀篤、喜蔭（佐々木）である。このうち、門脇重固であるが、後に述べる鹿島本家からの新出資料にその名があり、これも米子の歌人であることがわかる。七編は嘉永七年（一八五四年）の刊行、これも「作者姓名録」はない。三好秀興、鹿島重好、佐々木喜蔭、中林古樹、鹿島重尚の名が見受けられる。八編は編者の加納諸平の死によって、刊行されなかったが、稿本が岡山の正宗文庫にあるという。[8]米子の歌人の名がある可能性はあるが、未見である。

次に、長沢伴雄[9]の編『類題和歌鴨川集』を見ていきたい。これは、初編から五郎集まで刊行されている。また、関連書として『鴨川集詠史歌集』初編ならびに二編がある。いずれにおいても、「作者姓名録」が附属されている。

附属の「作者姓名録」から編ごとにその記述を並べる。

初編（嘉永元年（一八四八年）刊行）
喜蔭　伯耆米子　佐々木出羽守
古樹　伯耆米子　中林元亭
次郎集（嘉永三年（一八五〇年）刊行）
なし
三郎集（嘉永四年（一八五一年）刊行）
重好　伯耆米子　鹿島伊右衛門
四郎集（嘉永五年（一八五二年）刊行）
友愛　伯耆米子　大谷恵左衛門
日孝　伯耆米子　実成寺
重好　鹿嶋
貫一　伯耆米子　山田泰治
兼烈　因幡藩　伯耆米子住　大谷兼烈
古樹　中林
常之　伯耆米子　片岡安肇
秀興　伯耆米子　三好久五郎

秀年　同人男　三好慶三郎
五郎集（嘉永七年（一八五四年）刊行）
日孝　実成寺
長行　伯耆米子　鹿嶋次郎左衛門
古樹　中林

このうち、鹿島重好（一八三〇～一八九二）は下鹿島家二代目の重意の四男で、嘉永七年（一八五四年）に分家して岩倉町に住み、「岩鹿」と称された人物である。町年寄を務め、維新後は島根県初の県会議員となる。墓は寺町の心光寺にあるという。[10] 同様に、日孝は実成寺（米子市寺町）の二十一世で、豊運院日孝上人といわれる。明治十三年（一八八〇年）九月十日、遷化する。[11] また、鹿島長行は鹿島本家九代目である。[12] ともあれ『類題和歌鴨川集』においても、米子歌人たちは四郎集を中心に一定の活躍をしたと考えてよいだろう。

一方、『鴨川集詠史歌集』の方はどのようだろうか。同じく編ごとに並べてみる。

初編（嘉永六年（一八五三年）刊行）
古樹　伯耆米子　中林元亭
二編（編纂は同時期だが、遅れて大正二年（一九一三年）に活字本にて刊行される。）
重好　伯耆米子　鹿島伊右衛門
武彦　伯耆米子　中林玄備
古樹　伯耆米子　中林元亭
秀興　伯耆米子　三好久五郎

続けて、他の「類題和歌集」をみてみよう。『類題採風集』は、黒沢翁満[13]の編でこれも全巻に「作者姓名録」が附属されている。

初編（嘉永六年（一八五三年）刊行）
なし
二編（安政四年（一八五七年）刊行）
日孝　伯州米子　実成寺
友愛　伯州米子　大谷恵右衛門
知方　伯州米子　森雅楽
長行　伯州米子　鹿嶋治郎右衛門
道可　伯州米子　墨屋孫右衛門
重好　伯州米子　鹿島伊左衛門
秀興　伯州米子　三好久五郎
秀年　同　三好慶三郎

初編には米子の歌人は見られないが、二編には八人の名が残されている。このうち鹿島長行による『類題採風集』への寄稿に関する資料が新たに発見されたが、このことは後で述べたい。

『類題稲葉集』は中島宜門[14]の編で、嘉永五年（一八五二年）の編集、安政三年（一八五六年）の刊行である。「作者姓名録」はない。米子の歌人では、中林武彦、片尾常之、中林古樹、鹿島重尚、門脇重矩、鹿島重好、村瀬鎮喜、三好秀年、実成寺日孝、喜蔭（佐々木）、秀興（三好）が歌を残している。また、『出雲国名所歌集』[15]は富永芳久[16]の編で、初編が嘉永四年（一八五一年）、二編が嘉永六年（一八五三年）に刊行

されている。これも「作者姓名録」はない。初編に鹿島重尚、鹿嶌重正、また二編に三好秀興の詠歌が掲載されている。なお、『米子市史（旧版）』には他に片尾虎之、近藤常徳なる人物の歌が掲載されているが、その出典ならびに人物ともに不明である。参考までに記しておく。

ここまで挙げた「類題和歌集」等であるが、あくまで刊行されたものに限っての話となっている。歌集に寄稿し、選ばれて掲載されるわけであるから、その内容はともかくとして、実際はその数十、数百倍の歌があったものと考えられる。また、先行研究についても刊行された資料に拠ってなされている状況であり、版本になる以前の歌壇の資料については整理が着いているわけではない。よって、ここまでは、ある意味においてアウトプット（結果）の資料であるということは否めないわけである。

三、鹿島本家和歌資料から

鹿島本家から和歌に関わる資料十数点が確認されたのは、近年のことである。郷土史家の船越元四郎氏が作成した手書きの目録が残されてあるので、従前にこれらの資料は船越氏によって閲覧されていたわけである。しかし、これらの資料一括が二〇〇八年十一月に米子市教育委員会に寄贈され、山陰歴史館に移管されたことにより、調査状況が好転した。これらの資料のうち多くは写本であり、全くの新しい資料であったので、稿者などは大いに喜んだ。そして、これらが従前の米子歌壇に対する見方をいくらかでも発展させることは明らかであったので、調査を開始したということである。

さて、ここでは鹿島本家より山陰歴史館に寄贈された和歌資料のうち写本であるもの十五点を挙げ、簡単にその書誌を示すことにしたい。

①『ゆめの詠』

【教育委員会整理番号】二二一【丁数】八丁【大きさ】縦二五・九センチメートル、横一八・五センチメートル【冊数】一冊【備考】表紙に「弥生　由免の詠　初篇　會林重篤持」とある。また、末尾に「えりうた猶あれと折ふし哥用畧之」とある。歌人として、重棋、重昌、長寿、重篤、豊隆、長孝の六名の名がある。このうち長寿は鹿島本家の十代目である。[17] 全十二番の歌合に加え一首、続いて「えりうた」八首を載せる。収録歌の一つには、「左　海上霞」として「弓か濱おし明かたの三保か崎果なき浪も霞出すかな　重棋」などとあり、その判詞には「よろし」とある。こうした弓ヶ浜や美保関のように地域を詠んだものもあり、興味深い。

②『歌合』

【教育委員会整理番号】二二三【丁数】九丁【大きさ】縦二九・八センチメートル、横二一・一センチメートル【冊数】一冊【備考】歌人として日孝、兼烈、重固、豊正、常之、重好、建比古、兼利、長行の九名の名がある。末尾に「十一月十日午わかことし　古蔭」の記述がある。「古蔭」は小谷古蔭[18]で、歌合の判者も古蔭であったと考えられる。全十五番の歌合に加え、「えりうた」七首を載せる。なお、他の短冊資料などの筆跡から見て、十五番の歌の判詞の部分と「えりうた」の部分二葉すべては、古蔭自筆のものと思われる。小谷古蔭自筆資料とすれば、歌合の実施や書写など、その経緯も含めて検討の余地があろう。

【写真2】

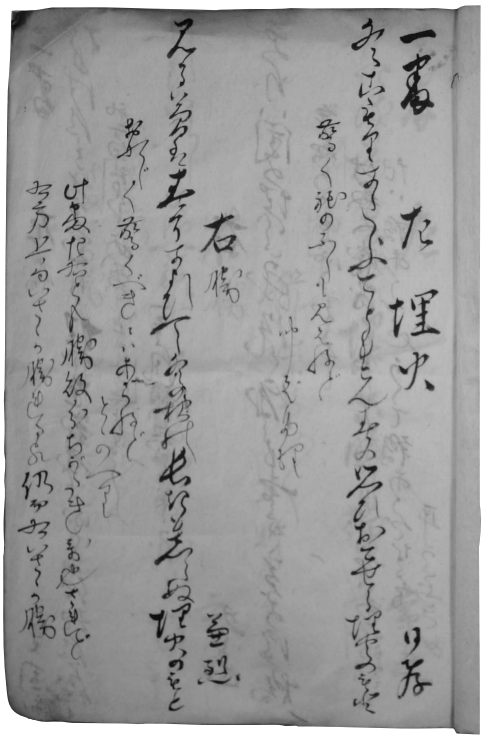

写真２　『歌合』（鹿島本家旧蔵）

③『無題歌合集』

【教育委員会整理番号】一三三一、一三三二【丁数】一〇二丁【大きさ】縦二八・〇センチメートル、横二〇・二センチメートル【冊数】一冊【備考】外題、内題がともにないため、仮に『無題歌合集』としている。嘉永六年十月から同八年正月までの歌会を記録している。筆跡から鹿島長行の書写と考えられる。この資料については、別に項を立てて説明したい。【写真３】

④『採風集二編料』

【教育委員会整理番号】一三二【丁数】二二丁【大きさ】縦二八・二センチメートル、横二〇・四センチメートル【冊数】一冊【備考】筆跡から鹿島長行の書写と考えられる。表紙に「黒澤翁満大人撰　採風集二編料　はゝきの国米子　鹿島治郎右衛門　長行　上」とある。これは鹿島長行が『類題採風集』二編に寄稿したその資料であろう。全て鹿島長行の詠歌と考えられる。本写本に収める和歌は二百二十首であるが、最終的に『類題採風集』二編に採録されたのは、このうちわずか五首に過ぎない。単純計算して、採録率二・二七パーセントであり、採録されることの厳しさが理解できる。本写本の詞書には「出雲の国造殿御賀に」「西行上人六百五十四忌寄花懐旧といふことを」「重好の母の身まかり給ふ時」「重好ぬし出雲の国造か旅宿しけるに」「萩園翁霊を改し夏懐旧といふ事を」「古蔭ぬし五月はかり帰国せられけるお礼に」などとあって、興味深い。「出雲の国造」は、『類題採風集』の刊行された安政四年においては、千家尊孫であり、国造家との関わりを考えるべき内容となっている。また、鹿島重好の母の死などが記されている。なお、西行その人は一一九〇年の没、「萩園翁」というのは国学者の夏目甕麿（一七七三～一八二二）で加納諸平の父に当たる。さ

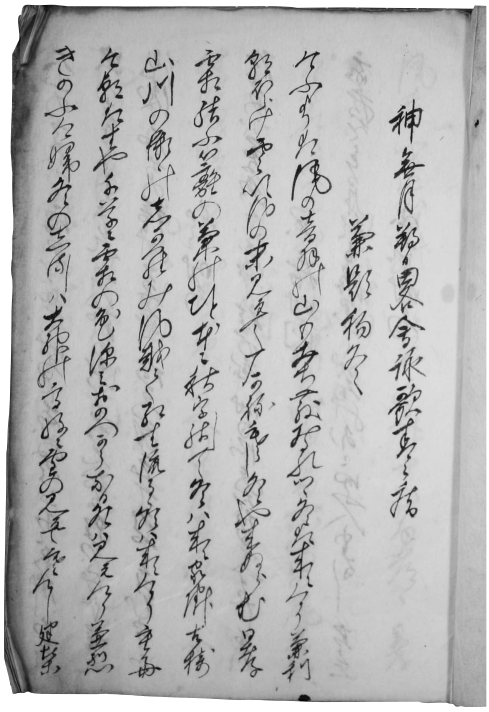

写真３　『無題歌合集』（鹿島本家旧蔵）

て、本写本の表紙裏には「古樹下見㊀印廿八首ヤリタリ十月頃には出来可し」とあり、米子の中林古樹が和歌の選定に関わったことがわかる。（「十月頃」云々とあるが、この時に具体的に何ができるのかは不明。『採風集』の刊行のことを言うか。）実際に本写本の和歌の下部には、ちょうど二十八箇所に㊀印が付されていて、この記述の裏付けとなっている。この㊀印以外にも和歌の上部には○印と△印が付されており、和歌の評価を複数の人物が行ったことが知られる。これは、「類題和歌集」への寄稿までのプロセスを知り得る興味深い資料である。【写真4】

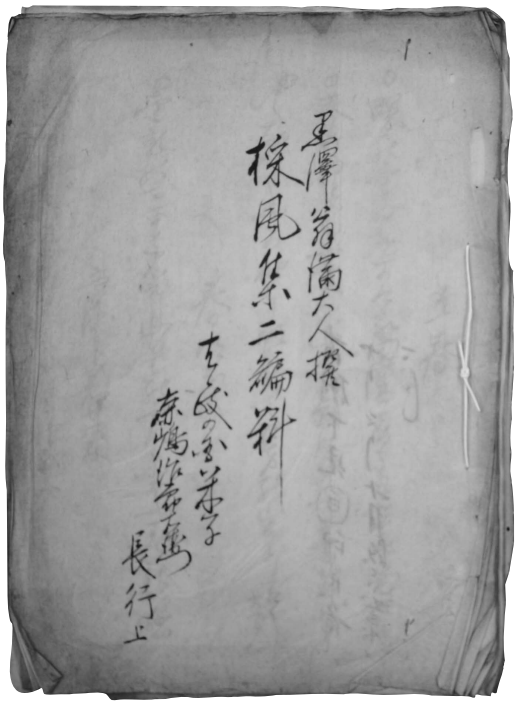

写真４　『採風集二編料』（鹿島本家旧蔵）

⑤『春の部　詠草上』

【教育委員会整理番号】二二三【丁数】一二丁【大きさ】縦二六・七センチメートル、横一八・四センチメートル【冊数】一冊【備考】詠者・筆者ともに不明である。詞書の一つには「明王院の花見にまかりて社頭花といふ題にて」とある。明王院は大津市の寺院のことを指すか。また、他の詞書に「元勝田へ花見にまかりて」とある。これは、米子市勝田の勝田神社のことであろう。同じく「佐々木某の御もとにて桃桜をよめる」「門脇の庭の桜をよめる」などとあるが、佐々木も門脇も米子の人物である可能性が高い。よって、その伝来や内容から、米子の人物による歌集であると認められる。なお、この⑤から⑩まではつれであり、筆跡も同筆である。

⑥『春の部　詠草下』

【教育委員会整理番号】二二四【丁数】八丁【大きさ】縦二六・五センチメートル、横一八・二センチメートル【冊数】一冊

⑦『夏の部　詠草』

【教育委員会整理番号】二二五【丁数】一九丁【大きさ】縦二六・五センチメートル、横一八・二センチメートル【冊数】一冊

⑧『秋の部　詠草』

【教育委員会整理番号】二二六【丁数】二七丁【大きさ】縦二六・五センチメートル、横一八・二センチメートル【冊数】一冊

⑨『恋の部　詠草』

【教育委員会整理番号】二二七【丁数】三丁【大きさ】縦二六・三センチメートル、横一八・七センチメートル【冊数】一冊

⑩『雑の部　詠草』
【教育委員会整理番号】二二八【丁数】一〇丁【大きさ】縦二六・三センチメートル、横一八・二センチメートル【冊数】一冊

⑪『和歌　長行』
【教育委員会整理番号】二三六【丁数】四五丁【大きさ】縦八・〇センチメートル、横一七・五センチメートル【冊数】一冊

⑫『和歌雑集』
【教育委員会整理番号】二三七【丁数】二七丁【大きさ】縦八・〇センチメートル、横一七・六センチメートル【冊数】一冊

⑬『甲寅夏　採風集二編料　詠草』
【教育委員会整理番号】二四〇【丁数】一三丁【大きさ】縦一三・三センチメートル、横一八・〇センチメートル【冊数】一冊【備考】表紙に「甲寅夏　採風集二篇（朱）　詠草　国所（朱）　鹿嶋（朱）　長行上（朱）　御印可下候」とある。「甲寅」は安政元年（一八五四年）である。これも、④と同様に鹿島長行の『類題採風集』への寄稿に関わる資料である。

⑭『神道教説集』
【教育委員会整理番号】二四一【丁数】四九丁【大きさ】縦一二・七センチメートル、横一七・六センチメートル【冊数】一冊【備考】外題・内題ともにないため、内容から仮に『神道教説集』とした。神道関係の和歌集と考えられる。千家尊福の詠歌が所収されている。また宗忠大明神（黒住教）関係の記載もある。

⑮『和歌草稿　全』
【教育委員会整理番号】二四四【丁数】九丁【大きさ】縦一二・五センチメートル、横一八・六センチメートル【冊数】一冊【備考】漢詩数種の後、和歌を載せる。和歌部分の冒頭に「えりうた　逢寿庵　長とし」とある。「長とし」は鹿島長寿であろう。

四、『無題歌合集』から

鹿島本家和歌資料の④とした写本『無題歌合集』は、今まで知られることのなかった米子の歌人を広く抽出できる点において重要である。本写本が、嘉永六年十月から八年正月までの歌会を記録していることは既に述べた。ここには、二十三回に及ぶと考えられる歌会が記録されており、以下、順序立ててそれぞれの歌会について整理したい。

①「神無月朔日暑会詠歌青々庵」
歌人：兼利、日孝、古樹、重好、兼烈、建比古、武彦、常之、豊正（九名）

②「おなしく十九日暑会　滄廼舎」
歌人：兼烈、常之、日孝、兼利、重好、古樹、長行、豊正、建比古（九名）

③「おなしく廿八日暑会　虎嘯軒くさ〳〵」
歌人：日孝、冬人、兼烈、古樹、常之、兼利、建比古、重好、武彦、長行、重固（一一名）

④「霜月二日暑会　日孝」
歌人：兼烈、日孝、重固、豊正、常之、重好、建比古、兼利、長行（九名）
⑤「兼題橋上霜　古蔭撰」
歌人：孫喜、重矩、常之、重好、尊蔭、知方、房則、秀年、豊正、重固、兼利、かをる、長行（一三名）
⑥「兼題鷹狩　古蔭喜蔭両撰」
歌人：孫喜、薫、兼利、知方、常之、尊蔭、重好、房則、日孝、重固、繁材（一一名）
⑦「兼題閑居夢　古蔭撰」
歌人：薫、秀年、常之、尊蔭、孫喜、繁材、日孝、長行、兼利（九名）
⑧「兼題馬　古蔭撰」
歌人：常之、薫、孫喜、日孝、尊蔭、重好、長行、宗武、重固、国常、定遠、古蔭（一二名）
⑨「兼題冬暁月」
歌人：兼利、日孝、房則、かをる、孫喜、長行、常之、重固、宗武、房則、兼利、古蔭（一二名）
⑩「網代」
歌人：常之、薫、孫喜、重好、重固、房則、長行、兼利、日孝、国常、古蔭（一一名）
⑪「埋火　寄山恋」
歌人：重固、貞明、重好、薫、兼利、孫喜、長行、常之、秀年、房則、安武、信久、豊正、名しれす、古蔭（一五名）
⑫「題　立春　社頭松」
歌人：兼利、常之、薫、秀年、英堅、豊正、宗武、長行、秀興、重固、国常、孫喜、古蔭（一三名）
⑬「雪中若葉」
歌人：孫よし、重よし、常之、薫、兼利、重固、長行、英堅、豊正、宗武（一〇名）
⑭「舩上山」
歌人：長行、宗武、常之、重好、薫、重固、孫喜、英堅（八名）
⑮「山家鶯」
歌人：孫よし、重好、兼利、薫、宗たけ、長ゆき、常之、重固、豊正、繁き（一〇名）
⑯「替恋」
歌人：重固、豊正、孫喜、兼利、長行、名しれす、常之、薫、英かた、繁き、宗武、重好（一二名）
⑰「田家梅」
歌人：常之、重好、正俊、豊正、兼利、国常、宗武、長行、重固、薫、繁材、知方、孫喜、光道（一四名）
⑱「鐘」
歌人：知方、正俊、常之、繁材、国常、重かた、長行、豊政、薫、重好、兼利、定遠、孫喜（一三名）
⑲「九月末つかた　喜蔭選」
歌人：長行、英堅、兼利、千代蔭（四名）
⑳「遠山雪　喜蔭武彦両撰」
歌人：長行、秀年、兼利、千代蔭、英かた、重好、飛入（七名）
㉑「喜蔭武彦両評」
歌人：秀年、貞明、英かた、素雅、兼利、金京、長行、信久、一哉、

千代蔭、秀年（一一名）

㉒「題　朝落葉　炭竈　橋　喜蔭評」

歌人：兼利、長行、千代蔭、英かた、秀年、重好、金京（七名）

㉓「兼題　立春　喜蔭武彦」

歌人：兼利、千代蔭、秀年、重好、長行、英堅、飛入、素雅、信久（九名）

ここに記載される歌人のうち、刊行された「類題和歌集」などに名前のあるものも多い。実成寺日孝、中林古樹、鹿島重好、大谷兼烈、中林武彦、片尾常之、鹿島長行、門脇重固、門脇重矩、三好秀年、三好秀興が米子在住の歌人として、それに相当する。同じく米子歌人の佐々木喜蔭は詠歌こそ見当たらないが、判者として活躍しているようである。その他、「類題和歌集」などに載らなかった人物も多く見出され、むしろそちらの方が人数として多いようにも見受けられる。もちろん、こうした人々も米子の歌壇を支えていたわけであり、無視するわけにはいかない。その中には「名しれす」とか「飛入」といった素姓のわからないような人物の表記もあり、案外にこの歌壇がオープンでおおらかな会であったことも想定できるのである。

米子在住の人物とは必ずしも言えないが、判者また詠者として、小谷古蔭の名が見られることは興味深い。この『無題和歌集』で小谷古蔭は、⑤「兼題橋上霜　古蔭撰」に判者として記され、⑫「題　立春　社頭松」までその名が載っている。⑤の直前の④が「霜月二日」であるので、小谷古蔭が嘉永六年（一八五三年）十一月から翌七年一月まで米子に逗留していたことがわかる。また、⑪「埋火　寄山恋」では、「嘉永六とせのうし」の年記とともこの歌会の感想を述べてもいる。

判者を務めていることなどから、この時期の米子歌壇が古蔭の指導を受けたのは確実で、この資料についても和歌の指導のために請われて米子に来たことが推察される。後に述べるが「鹿島家短冊帖」には古蔭の直筆の短冊が残されており、当時の鹿島本家や米子歌人たちと深い交流のあったことが推測されるのである。

この『無題和歌集』であるが、その一部である⑭「舩上山」を見てみよう。

左　　舩上山

月影はやゝかたふきて舩上の山風寒し小夜や更ぬる　長行

右勝

舩上の雲打はらひ来て見れは高根は松の嵐のみして　宗武

左勝

籏雲のむかしをとへは舩上の嵐身にしむ山鳩の声　常之

右

漕出ておもひかへせは舩上の山は浪路の命なりけり　重好

左

沖津浪よせては返す舩上やねち木か原の朝のしら雲　薫

右勝

白雲のかゝれる見れは舩上の雪の高根や色くもらせん　重固

左勝

舩上や高根の嵐降雨に沖津白波立帰りつゝ　孫喜

右

舩上の追風かなひぬ和田海の沖よりかけてなひく籏雲　重好（続く）

後醍醐天皇の故事でよく知られる船上山について詠んだものである。ともすれば、月並みな内容になりがちな和歌の列記であるが、これは伯耆地方の地域性の高い素材を描いており、飽きることがない。

五、『絡石（つた）の落葉（長沢伴雄歌文集）』から

長沢伴雄が『類題和歌鴨川集』の編者であることは既に述べた。『絡石の落葉（長沢伴雄歌文集）』には、伴雄と米子の歌人たちとの交流が記されている。なお、和歌冒頭の番号は国立台湾大学本の出版時における通し番号である。[19]

①中林古樹か伯耆国にかへるに

4721 きてかへる君かにしきの浦なみに我袂をもあえてぬらさむ

弘化元（１８４４）年

4722 こぎかへる舟のうへこそかねてわか心をのする所なりけれ

弘化元（１８４４）年

これは、中林古樹が米子に帰る時に及んで、長沢伴雄が詠んだものである。遠く伴雄のいた紀州まで古樹が来たことを意味するのであるから、この当時の人々の往来には驚くばかりである。

②伯耆米子実成寺日孝が茶席のかけ物にする料の歌をとこへるに

5149 あなかまといふ人もなし松風のしらふることにかよふ響は

安政元（１８５４）年

米子寺町の実成寺の日孝に関わる記事で、「茶席のかけ物」用の歌を求めている。これは日孝が伴雄に手紙を認めたのであろう。

③伯耆米子鹿島重好（正イ）か翠園六勝の図画にか、せて歌こへるに

春　鳥取城はるかに見えて花咲たるところ

5166 天そ、り高城の軒にさくはなの雲のかけ橋かけてこそ見れ

嘉永四（１８５１）年

夏　池水のほとり柳の蔭に机あり。煎茶の器ともおきたるところ

5167 いけみつのす、しき心くみ〳〵てけふもくらし、柳蔭かな

嘉永四（１８５１）年

秋　もみちの大なるある庭に月すみたり

5168 思ひくまありてや月の照すらむ人来ぬ庭のよるのにしきを

嘉永四（１８５１）年

冬　垣根に雪つもらせたるはるかに大神山見えたる

5169 大神の高峰のゆきを時しくにまかきの山としめて見るらし

嘉永四（１８５１）年

隣寺暁鐘

5170 き、なれて夢もうこかすなりにけり軒端つ、きの暁のかね

嘉永四（１８５１）年

窓前松濤

5171 窓の戸の松の上なみ音はしてよらぬ人ゆゑおとろかれつ、

嘉永四（１８５１）年

鹿島重好か鹿島重正か、異本注記により判然としないが、これは「翠園」とあるので重正が正しいようである。重正が「翠園六勝の図画」を制作し、それにそれぞれ六首の和歌を求めたということである。な

お、「大神山」は大山のことである。

④童の牛にのりて笛ふくところ　伯耆米子鹿島重好乞

5328 笛の音に日ねもす心繋かれてくるゝをうしと思はさるらむ
安政元（１８５４）年

5329 いとなかき笛のしらへに引るらむ繋かぬ牛の急くともなき
安政元（１８５４）年

5330 笛の音のとまるまてとや思ふらむ行道草のゆたけなるかな
安政元（１８５４）年

5331 長閑にもあはする笛の調へかなゆくへ急かぬ牛のあのとに
安政元（１８５４）年

こちらは鹿島重好の求めによる。同じく絵画にふさわしい和歌を求めたのであろう。

⑤同し年、鹿島重好か母身まかりぬといひおこせける時

5973 よそなからよその歎きとおもはすよ我さへ旅に一目見し君
嘉永五（１８５２）年

鹿島重好の母の死に関連して歌を詠んでいる。鹿島本家和歌資料の『採風集二編料』の詞書にも同様な記述があったので、重好の母は人徳に厚い人であったようだ。

⑥110「伯耆国米子人鹿島重尚か短冊帖のはしかき」

「…しかるをまた一くさの花ありとて米子の里人鹿島の重尚若子か見せたるそ、はや人の心を種として万の言の葉に咲出てちることもしらす。色香のあすることはたなきうまし花、これを言の葉の花となもいふめる。重尚い天の下に天はせ使をまたして西に東にいとらせあつめて帖と名号たる垣内のひろらかにうるはしきか中に植なへたるはもよ。…」

これは、短冊帖の序の内容である。鹿島重尚が自製の短冊帖を作成するにあたり、伴雄にその序を求めたのである。その内容を伴雄が控えていたのである。その一部を引用した。

⑦111「短冊帖の序書」

「…其頃しも鹿島重好か伯岐の米子よりせうそこしておなしさまのたにさくおこせて、予にも門人らにも讃させてよと乞もとめき。こは予か思ひよれるを米子にゆつりたるにもあらす、重好かこのめるを奪たるにもあらす。かたみに見もし、きゝもせすしてかくあるは魂あへりとやいひてまし。かくて重好其あつめたるを帖にてうしたりとて、それか序をとこふまゝにやかて筆とりて其ゆゑよしをしるしつ。されとおのれがのはかよわきわざ、重好かのは富のあまりにてひとし並にいふへきにあらすかし。」

こちらのは、「短冊帖の序書」についての伴雄の考えを記したものである。鹿島重好の伴雄への依頼がとまらない。まず、同じような短冊を伴雄にたくさん送り付け、伴雄やその門人たちの詠歌を求めている。その詠歌を短冊に書いてもらい、重好のもとに送るわけである。このようにして集めた短冊によって、重好は短冊帖の制作を思いつくが、

その短冊帖の序を再び伴雄に求めるのである。引用にあるように、重好は「富のあまり」によって、こうしたことを行うわけである。伴雄は多くの謝礼を手にしたに違いないが、そのことに必ずしも満足しているわけではないようである。

このように長沢伴雄は複数の米子歌人と交流があったようであるが、歌人としての文化的な繋がりのほかに、金銭を介した経済的な繋がりもあったように思われる。この時期、鹿島一族は本家も分家も豊かな経済力を保持していたようで、こうした経済的な基盤が米子の歌壇を育んだとも考えられるのである。米子の歌人にとって、伴雄のような一流の国学者・歌人との付き合いや、そこから生じたその詠歌・筆跡・文などの所持は、彼らの文化的なステータスとして望まれるべきことであったに違いない。

六、「鹿島本家短冊帖」について

二〇一〇年になってから、鹿島本家から短冊帖の所蔵を知らされた。仮に「鹿島本家短冊帖」としたいと思う。[20] これは、三十年程前に短冊そのものが鹿島本家の土蔵より発見され、それを近年短冊帖としてまとめたという。折帖二帖に絵短冊を含む短冊一九二枚が貼られており、そのうち和歌短冊は江戸時代から大正時代頃までの筆跡である。なお、これは引き続き鹿島本家の所蔵である。【写真5】

詠者ならびに筆者であるが、皇族や公家の系統のもの、歌人・国学者の系統のもの、米子の町人のものと三分類ができる。

皇族・公家では、伏見宮家の十九代の貞敬親王（一七七六～一八四一）、上冷泉家の十八代の冷泉為則（一七七七～一八四八）、裏辻家の八代の裏辻公理（一七五六～一八〇五）、中院通古の次男で松風軒と号した中院空山、風早家の七代の風早公元（一七九一～一八五三）のものがある。歌人・国学者では、『伯陽六社みちの記』[21] 等の作者で米子商人の竹内時安斎[22]（一六三八～一七〇八）、鳥取藩国学方を務めた飯田年平（一八二〇～一八八六）、小谷古蔭、鳥取藩士の門脇重綾（一八二六～一八七二）、中島宜門、出雲大社神職の千家尊孫（一七九六～一八七三）、大江広海（一七六九～一八三四）、太田垣連月（一七九一～一八七五）、大田南畝（一七四九～一七九一）などがある。米子の町人では、

写真５　「鹿島本家短冊帖」（鹿島本家現蔵）
左から小谷古蔭、竹内時安斎、中島宜門（２枚）

鹿島長好（鹿島本家八代目）、鹿島長行（同九代目）、鹿島長寿（同十代目）、鹿島重正（鹿島分家）、鹿島重好（鹿島分家）などが挙げられる。

これらの短冊のうち、何点かその内容を見てみたい。

鹿御大人の御愛子御誕生ありしを祝して
　弥増に栄ふる松のみとり子はけにこそ千世の初なりけれ　豊正

長孝君の婚礼に寄梅祝
　うつし植し園生の梅の初花は千世をふかめてにほふ春かな　重篤

詠者の「豊正」「重篤」ともに、鹿島本家和歌資料にその名前が出てくる。出産、婚姻とともに祝いの歌となっている。鹿島本家への贈りものでもあったわけだから、こうした内容のものが多くのなるのは自然のなりゆきであろう。

甲子試筆　船上山
　春されはおきつしら浪音絶て雲井にかすむ船上の山　長行

花の歌
　あらましに思ひしよりもおもひます花はさくらのはなにそ有ける　尊孫

「長行」は鹿島長行で、この歌は『無題歌合集』にも収められている。甲子は元治二年（一八六四年）である。また、「尊孫」は千家尊孫で、この時代の山陰地方を代表する歌人の一人である。

こうした短冊からも、幕末から明治にかけての米子の町人が盛んに和歌の創作に関わっていたことが了解される。また、米子町人と当時一流の国学者との関わりを考える上でも、こうした資料は重要である。財力のあった米子の町人が、この時期、多くの文化人と接触したらしいことは既に述べたが、この短冊帖は、そのことを実証していると言えるだろう。和歌の詞書には、社会生活に関わる具体的な内容も垣間見ることができ、江戸時代から明治時代にかけての米子の町の文化や風俗を知る材料にもなる。

七、まとめに

近年、新たに資料の発掘が進み、より明確に幕末の米子の歌壇について知ることが可能になった。地域の文芸史としての意味以上に、日本文学全体を視野に入れた、地方歌壇の具体的な様相を理解できる資料として、その価値を見据えていきたい。というのは、米子という一地方を定点として考察する方法によってしても、浮かび上がって来たのは、むしろ文芸のネットワークの問題の方であるからである。米子の歌壇は、狭い範囲においては、鳥取藩における国学や和歌創作の動向、また『類題八雲集』[23]など多くの刊行物を世に出している出雲歌壇の動向に大きな影響を受けている。一方、広い範囲においては、本居宣長を起点とした列島全体を揺さぶった文化的な運動、これを一般に「国学」の運動と呼べばよいだろうか、そうした動きにかなり連動していたはずである。米子歌壇は、独自に生成・発展したものではなく、当然、こうした文化的な波状を刺激として受けつつ徐々に形成されてきたのであり、むしろ米子の歌人たちは積極的に外部性を取り入れる

姿勢を示している。具体的には、小谷古蔭を招致したり、長沢伴雄や黒沢翁満と交流を持ったことが、本稿で確認した資料から明らかになった。こうした現象は、程度の差こそあれ、全国的に普遍的なことではないだろうか。しかしながら、米子の歌壇の基盤として、そこに商業資本の豊富な蓄積のあったことは確認しておきたいと思う。税制等による富の蓄積を基盤として制度的に成し遂げられた文化よりも、商業行為から蓄積された経済的な基盤による文化の営みの方が、より先進的で自由な面が内包されやすいのではないかと思うのである。

さて、幕末の地方歌壇の営みによって、地方の人々の言語表現能力は大いに高まったというように考えることもできる。地域の指導者的な存在である彼らが、漢詩とともに和歌を創作したこと、これは決して過去の遺物とは言えないであろう。近代以降の漢文訓読体の発達や欧文の漢語への翻訳などに漢文の知識が多いに貢献したように、明治期以降、和歌は直観的・感覚的な心象を和文で表現していく能力の向上などに役立ったものと考えられる。また、和歌文化によって導かれた教養や知性のあったことが、幕末以降の複雑な社会的転換を乗り越えていく力の一つになったとも考えられるのである。このことは、本稿で挙げた幕末の歌人たちが、明治期以降も大いに活躍していることによって表わされている。

加えて、本稿においては書写資料の重要性も述べたつもりである。幕末の歌壇を考える上で、「類題和歌集」の意義は大いにあるのであるが、出版物としてのそれのみを対象にすることにはいくらか疑問が生じる。刊行され、一定の姿を形づくる以前の和歌の営みにも、大いに魅力は見出せるように思う。

長らく、国文学の研究において、地方のものは軽視されてきたように感じられる。このことは、その当事者たちが一番理解していることであろう。今後は、地方の文芸をも射程に入れた研究姿勢が求められるであろうし、文学における地域と地域とのネットワークに関わる問題にも積極的に関与していかなくてはならないと思う。さもなくば、少なくとも「国文学」による地域貢献という重要課題の達成は不可能であるに違いない。

註

（1）『米子市史（旧版）』米子市役所（一九四二年）。名著出版から一九七三年に覆刻版が刊行される。全編、足立正の著とされる。なお、足立正については、梅林智美「山陰歴史館初代館長足立正の視点」『出雲文化圏と東アジア』勉誠出版（二〇一〇年）に詳しい。

（2）『鳥取県史』第五巻〔近世　文化産業〕（一九八二年）。関連部分は、山本嘉将の著である。

（3）加納諸平は、文化三年（一八〇六年）生まれ、安政四年（一八五七年）の没。江戸後期の国学者で歌人。本姓は夏目。通称は小太郎、杏仙、兵部など。また長樹、兄瓶とも称した。号は柿園である。父は国学者の夏目甕麿で、遠江の白須賀にて出生。父の縁で本居大平の門に入る。甕麿の死後、紀州藩医の加納伊竹の養子となった。天保二年（一八三一年）、藩の『紀伊続風土記』の編集に召し出され、国学者として仕えた。藩の内紛に巻き込まれ、加えて友人の長沢伴雄に毒殺されかけ、発狂する。病が癒えて後は、長らく公務を解かれる。晩年、藩の国学所総裁となるが、間もなく急死した。家集に『柿園詠草』がある。『類題鰒玉集』の編集及び刊行は、全国の歌壇を大いに活性化したことでよく知られている。

（4）『類題和歌　鰒玉・鴨川集』全六巻・クレス出版（二〇〇六年）による。これは影印本で、ここには『類題和歌鴨川集』も載せられている。

（5）「かしましげまさ　鹿島重正」『鳥取県大百科事典』新日本海新聞社（一九八四年）を参照されたい。

（6）佐々木喜蔭は、文化九年（一八一二年）生まれで、没年不詳である。歌人で米子の勝田神社の神官である。飯田秀雄（一七九一～一八五九）の門人。鳥取藩士で藩儒の正墻薫（一八一八～一八七五）の漢詩集『研志堂詩鈔』（文久元年（一八六一年）頃刊）に「勝田社、佐佐木嘉蔭（ママ）、招余飲、手間山、近在巽位、真園中物也、主人乞余記之、按古事記、八十神、怨大国主神、欲殺之、至伯耆国手間山下、焼巨石、自山上投之、大国主觸之死、而体皆糜爛、有神取蜑与蛤、合而塗之、遂蘇云、伯之海、今猶産蜑、其色赤、俗呼曰赤貝、此日供赤貝羹、結落故及之、　把酒殷勤論往時。手間山色手杯中。蒼茫万古留神迹。蜑貝猶余焦石紅。」とあり、その交流の幅と好奇心とが窺える。

（7）『米子市史（旧版）』によれば、鹿島長智は本居大平門下であるという。

（8）正宗文庫調査班「正宗文庫目録（五十音順、典籍編）」『調査研究報告』二九号（二〇〇九年）には、「類題鰒玉集　八編」とあり、七冊の稿本で、「紀伊國柿園蔵」の蔵書印があるという。

（9）長沢伴雄は文化五年（一八〇八年）生まれ、安政六年（一八五九年）の没。江戸後期の国学者で歌人。本姓は吉岡。通称は十蔵、衛門など。絡石舎と号した。紀州藩士の吉岡家に生まれ、長沢家の養子となった。十代藩主の徳川治宝が文事を好んだため知遇を得、さらに政治的な密命を帯びて暗躍することもあった。友人の加納諸平に毒を盛ったのも、一連の藩政内紛に関連するという。治宝の死後、一派とみなされて罪を問われ、獄死する。加納諸平に対抗して刊行した『類題和歌鴨川集』は、『類題鰒玉集』とともに近世後期の歌壇を大いに活気づけた。

（10）「かしましげよし　鹿島重好」『鳥取県大百科事典』を参照されたい。

（11）米子市寺町の実成寺からの聴取によれば、日孝は、「実成寺二十一世中興　豊運院日孝上人　明治十三年九月十日遷化」とのことである。

（12）鹿島長行は、「鹿島家短冊帖」の長行詠歌の裏書によれば、六十一歳で没した。岡本千太郎の追悼漢詩和歌集『有感集』（明治二十五年序）に、「さけはちるものとおもへとなつかしきかえり見らるゝ山さくらかな」の詠歌を残す。

（13）黒沢翁満は、寛政七年（一七九五年）の生まれ、安政六年（一八五九年）の没。江戸後期の国学者で歌人。桑名藩士重孝の長男。通称は九蔵、八左衛門で、名は重礼という。屋号は葎居である。文化四年（一八〇七年）、十三歳で藩に出仕する。二十九歳の時に藩主の松下忠晃の国替に従って、武蔵国の忍に移住する。五十歳の頃から藩財政を掌握し、大坂蔵屋敷に勤めた。青年期に相当量の国書を読破して、独学で国学者また歌人としての地位を築いた。家集には、伊勢の門人らが編んだ『葎居前集』の他に、『葎居後集』『葎居集』がある。著書は作文・古典注釈・語学・随筆など多岐に渡る。奇書とされる艶書『藐姑射秘言』も翁満の著作である。

（14）中島宜門は、文化四年（一八〇七年）の生まれ、明治二十七年（一八九四年）の没。江戸後期から明治時代の武士で国学者。本姓は幸田で、字は祝甫、長録。通称は宜右衛門。号は回水園と称した。衣川長秋に歌道を学ぶ。鳥取藩の勘定所加役を経て、破損奉行を務める。慶応四年（一八六八年）、藩校尚徳館の編纂掛となって『伯耆誌』の編纂に携わる。隠居後は、高草郡の日吉神社、ならびに米子の勝田神社の祠官を務める。

（15）芦田耕一・蒲生倫子『出雲国名所歌集―翻刻と解説―』ワンライン（二〇〇六年）を参照されたい。

（16）富永芳久は、文化十年（一八一三年）の生まれ、明治十三年（一八八〇年）の没。江戸後期から明治時代の神職で国学者。名は初め愛之助、多計知、後に楯津とする。号は楯斎と称した。家は代々出雲大社の社家である。千家俊信、本居内遠の門に学び、和歌をよくした。後に楯廼舎塾を開く。著作に『出雲風土記仮字書』などがある。

（17）鹿島本家からの聴取によれば、鹿島長寿は鹿島本家の十代目である。

（18）小谷古蔭は、文政四年（一八二一年）の生まれ、明治十五年（一八八

二年）の没。鳥取の栗谷に生まれる。米原豊秋に和歌を学ぶ。飯田秀雄がその才能を激賞し、加納諸平も同様に賛嘆する。弘化元年（一八四四年）、紀州に赴き、加納諸平に従学した。能書であったため、『鰒玉集』第五編の版下を筆写する。三年の滞在の後、帰国した。音楽にも造詣があったため、嘉永四年（一八五一年）七月の内侍所臨時の神楽を拝聴するために上京する。安政四年（一八五七年）、再び和歌山に赴き、和歌山藩の国学館の学頭代となる。万延元年（一八六〇年）、鳥取藩により召還され、国学方手伝となる。文久元年（一八六一年）、国学局出仕となる。慶応元年（一八六五年）、東照宮二百五十年忌の大祭に関わって、音楽指揮方となる。明治二年（一八六九年）、大教正となり、皇学寮講師兼音楽教師及び編修掛を命じられる。翌年、神務局神事掛を兼務する。翌々年、政庁に出仕する。同年、宇部神社の祢宜となるも、後に辞職する。十二（一八七九年）年六月、伯州会見郡東福原に居を移し、「六杉園」と号した。歌集に『六杉園集』がある。

(19) 本文の引用は、亀井森主編『台湾大学典蔵全文刊本1　長澤伴雄歌文集　絡石の落葉』第一巻～第三巻・国立台湾大学図書館（二〇〇八年）による。

(20) この短冊帖の発見については『山陰中央新報』（鳥取版）二〇一〇年三月一六日付、ならびに『日本海新聞』二〇一〇年四月六日付などで報道された。

(21) 梅林武雄校訂『伯耆の元禄旅日記　伯陽六社みちの記』〔伯耆文庫7〕今井書店（一九八九年）に翻刻されている。

(22) 竹内時安斎については、芦田耕一「奉納和歌の世界」『出雲文化圏と東アジア』勉誠出版（二〇一〇年）に詳しい。

(23) 芦田耕一・原豊二・山崎真克編著『『類題八雲集』―翻刻・解説と作者索引』〔私家版〕（二〇〇九年）に翻刻されている。

〔その他の参考文献〕

山本嘉将『近世和歌史論』文教図書出版（一九五八年）
辻森秀英『近世後期歌壇の研究』桜楓社（一九七八年）
『鳥取藩史』第一巻（一九六九年）

〔付記1〕本稿は、山陰研究センターの山陰研究プロジェクト「山陰地域文学・歴史関係資料の研究」（研究代表者・要木純一）による成果の一部である。

〔付記2〕『新修米子市史』第九巻・資料編・近世二（二〇〇二年）には、「鹿島家青々庵書画帖」が「米子町史編さん資料」「米子市役所蔵」として翻刻されている。この書画帖については現在調査中であるので、小論ではそのことを記すことができなかった。

〔付記3〕校正中に鹿島本家当主恒勇氏から次のような知識を得た。

五代長智　嘉永二年十一月六日没
七代長常　天保八年五月二十九日没
八代長好　万延元年八月十四日没
九代長行　明治二十七年十二月二十九日没（六十二歳）
十代長寿　昭和九年九月九日没（八十歳）

The poets in Yonago in the end of Edo era: For a research of new discovered waka materials in Kashima-Honke

HARA Toyoji
(Yonago National College of Technology)

〔Abstract〕

Recently many waka materials were discovered in Kashima-Honke. From these materials we can understand the conditions of waka poems and poets in Yonago from the end of Edo era to the first of Meiji era. Including the existing materials, I examine the conditions of them in Yonago again, and I show the circumstances of the local waka poems and poets in the end of early modern times.

Keywords : Yonago-kadan, Kashima-Honke, ruidai-wakashu, Kotani Furukage, Kurosawa Okinamaro, Nagasawa Tomoo